VNU Journal of Science, Foreign languages 28 (2012) 225-232

地域日本語教育・支援に関わる人に求められる資質・能力

横溝紳一郎*

佐賀大学

受領日: 2012 年 12 月 3 日；受理日: 2012 年 12 月 20 日

Abstract. This article attempts to clarify the necessities for people who are involved in teaching/supporting Japanese as a second language in local areas. By utilizing the analysis approach of 'a good language teacher', it became clear that Ms. Yuko Kitagawa, a good educator/supporter example, fulfills all of the characteristics of a good educator/supporter suggested by Shimada (2011), and that she has a strong *kakugo* (preparedness) to assist people from foreign countries.

1. はじめに

地域日本語教育・支援に関わる人に求められる資質・能力として，嶋田（2011：133-134)は，「日本語教育に関する知識・能力」「日本語教育に関する実践能力」「"その地域社会"を理解し，生きる力」「企画立案能力」「人をつなぎ動かす力」「対人関係を築く力」を挙げ，その職種別，すなわち「地域日本語教育専門家」「地域日本語コーディネーター」「システム・コーディネーター」「ボランティア」のそれぞれに，どの資質・能力がどの程度必要とされるのかについての議論を行っている。[1]

ある業種に関わる人間に求められる資質を特定する方法として，4 つのアプローチが考えられる。横溝・河野（2005）は，日本語教師の資質について，4 つのアプローチの枠組みを以下のように述べている。

① 教師の職務分析に基づくアプローチ

日本語教師が日常的にどんな仕事をしているかをまずは列挙し，その仕事をこなすために必要な資質・実践能力を記述するアプローチである。

② 教師・研究者の主張に基づくアプローチ

「いい日本語教師」であるための要素に関して，教育に携わる教師や研究者による「これが必要な資質だ」との主張がリストアップされていくアプローチである。

③ 学習者の希望・意見を収集し，まとめていくアプローチ

日本語学習者が日本語教師に求めているものについて調査を行い，その結果から必要な資質を挙げるアプローチである。

* E-mail: yokomizo@cc.saga-u.ac.jp

[1] 議論について詳しくは、嶋田（2011）を参照。

④「よい教師」の分析に基づくアプローチ

他者から「よい教師」と認識されている教師の具体的言動を分析し，それを「よい教師」に必要な資質・実践能力と位置づけるアプローチである。Rubin（1975）による「よい言語学習者（good language learner）」研究の，いわば教師版のようなものである。

これらの 4 つのアプローチには，それぞれ，以下のような限界が存在する（横溝・河野 2005）。

❶ 教師の職務分析に基づくアプローチの限界

職務をどこまでの範囲に設定するかによって，大きな影響を受ける。加えて，職務分析の信頼性を高めるためには，多くの教師の行動を実際に観察するか，または，多くの教師の内省を収斂する形で職務を分析することが求められる。しかしながら，どちらの場合も，どの教師がその作業に参加するかによって，結果に大きな影響が出てくることが予想される。

❷ 教師・研究者の主張に基づくアプローチ

各教師・研究者の意見・主張は，その教師・研究者のビリーフスにのみ基くことが多い，また，教師・研究者の意見・主張をまとめ分類することにより明らかになった意見・主張は，様々な教育現場で教師に求められる資質・実践能力の詳細に渡る記述には適さない。

❸ 学習者の希望・意見を収集し，まとめていくアプローチ

日本語学習者の希望・意見を聞いて，それを平均化することについての疑問が存在する。日本語学習者の教師に対する好悪感は，「相性」によって決まってくるのではないか，という疑問が存在する。

❹「よい教師」の分析に基づくアプローチ

「よい教師」をどう認定するかが，大きな問題となる。

このように，上記の 4 つのアプローチそれぞれに限界が存在することを考えると，ある職種に就く人間に求められる資質を特定する最も健全かつ有効な方法は，「4 つのアプローチを相補的に用いる」方法であると結論付けられるであろう。

嶋田（2011）での議論は，この中の「①職務分析に基づくアプローチ」に相当すると考えられる。残りの 3 つのアプローチで出てくる結果も踏まえて，「地域日本語教育・支援に関わる人に求められる資質・能力」についての議論を深めることができれば，求められる資質・能力もより明確になるであろう。本稿で残りの 3 つをすべて行うことはできないので，第 4 のアプローチに絞って，以下，論を進めることとする。

2. よい「地域日本語教育・支援に関わる人」の分析に基づくアプローチ

既に述べたとおり，第 4 のアプローチの限界は，「『よい教師』をどう認定するかが大きな問題となる」点にある。筆者自身が知っている「地域日本語教育・支援に関わる人々」は現状ではかなり限定されているのであるが，本稿では秋田県能代市の「のしろ日本語学習会」代表の北川裕子氏を分析対象としたいと思う。筆者は 2009 年 1 月にはじめて北川氏とお会いしたのであるが，その時のインタビュー調査や授業観察などによって「北川氏の実践は，極めて優れた実践である」と実感し，その後，東京外国語大学多言語・多文化教育研究セ

ンター編（2008）『地域日本語教育から考える共生のまちづくり：言語を媒介に共に学ぶプログラムとは』で詳しく紹介されている，北川氏の実践を深く知ることにより，同氏の地域日本語教育・支援活動をさらに高く評価するようになった。本稿では，これらの個人的体験に基づき，北川裕子氏を「よい地域日本語教育・支援に関わる人」とした上で，以下，論を進めることとする。

上掲の『地域日本語教育から考える…』に紹介された，北川氏の実践の内容を簡単にまとめると，次のようになる。（なお，本原稿の北川氏に関する記述は特に断りのない限り，同書からの引用とする)。

- 約20年前に中国残留帰国家族に日本語を教えた時に，「中国の人たちが多くの人たちによって差別され，非常に生きづらいと思っているが，ちゃんと自立して，人の手助けを借りなくても生きていけるようになりたいと本当は思っていること」に気づいた。
- 日本語さえ分かればその人たちはちゃんと自分のことができる人たちだということが分かってから，日本語支援の必要性を感じ，日本語教室を作った。
- 日本語教室を設立時に，教室で日本語能力を伸ばすだけでなく，「地域の住民としてキチンと受け入れられて，なおかつ自分で発信できる人間にしたい」という思いがあった。
- その後実践を続けた結果，日本語教室に通う外国人は「日本語力を伸ばし，キチンと自立して，地域の中に必要な人材として」育ってくれた。それだけでなく，行政側にとっても，この人たちがいてくれることが地域にとっていいと思われるようになってきた。
- その結果，行政側から，お金などの支援がもらえるようになった。

地域住民との共生という観点から考えると，理想的な多文化共生社会が実現しているように思え，そのこと自体にも，筆者は大きな感銘を受けたのであるが，一番筆者が共感を覚えたのが，のしろ日本語学習会の「日本語支援の理念」，「外国人が地域住民に受け入れられるようにするための創意工夫」，「地域住民との接触機会創出のための創意工夫」，そして「行政への働きかけの創意工夫」である。以下，それぞれについて述べていく。

2-1. のしろ日本語学習会の日本語支援の理念

日本語学習の必要性について，北川氏はこう語っている。

日本語ができなくては，中国が，韓国がと言っても誰も聞いてくれません。日本語が話せるようになって，キチンと受け入れられて初めて自分の国のことを語れるのです。地方ならではのことです。

つまりは，「マジョリティである日本人が話す言語『日本語』が使えなくては，日本人には受け入れられない。日本人から歩み寄ってくるようなことは，期待できない。」ということである。多文化共生社会について語られる時に，「多言語共生社会」の実現の重要性が強調され，「外国人にも母語で不自由なく生活できることが保障されるべきだ」と声高に主張されることが多いのであるが，北川氏のことばは「現実に目を向けてごらんよ。地域住民は，そんなにやさしくはないよ。」と語っているように，筆者には思える。

2-2. のしろ日本語学習会の外国人が地域住民に受け入れられるようにするための創意工夫

のしろ日本語学集会では，非常にたくさんの行事が行われている。これらの行事は，通常考えられる「国際交流を促進するため」という目的よりも，「地域の中できちんと生活できる人を育てる」という目的で実施されているところに，その特徴がある。各行事について，北川氏は次のように語っている。

[バス旅行]

バス旅行は，交流の目的もありますが，何時までにここに来ないとバスが出発するということを通じて，時間を守ることを学ぶ。バス旅行は楽しみと同時に，時間を守る人に育てる。状況にもよりますが，時間に間に合わないと，よく置き去りにします。だってあなたは時間に来なかったと言って。泣かれます。でも，これは教室だから許されることであって，会社とかさまざまなところに行ったら許されないことなのだということを肌で感じさせるためなのです。

[花見]

花見もします。花見のメリットは，楽しいから，日本の文化を知るからということもありますが，一番のメリットは何だと思いますか。ゴミです。花見を通じて「違う，それは燃えないゴミ。こっちの袋」「それは燃えるゴミ」というふうに，私たちが一緒にゴミの分別収集方法を伝えます。それから，日本人が花見で散らかしたのには，困ったわね，で終わりますが，外国人，特にアジアの人たちが入った花見の後にゴミが散らかっていると，だから外国人には貸せないのよ，二度とこういうところでやらせられないわと，酷なことをよく言われるので，私はこういう花見の後とか盆踊りの後というのは，掃除だけは徹底させます。来たときよりもきれいにする。地域の町の人たちと遊びに行ったときに，うちの教室の人たちは率先してゴミを拾うそうです。これは私たちも一緒に遊びながら，やらなければいけないマナー。ある意味で は，日本人よりずっとうちの教室の人のマナーがいいと思っています。

[習字]

習字もします。習字も何のためですか，文化紹介，いいえそれだけではありません。祝儀袋などは，日本の最たる習慣ですので，これを今のうちから書き方を練習する。名前の練習をする，筆の持ち運びを練習するというのは，これは生徒たちから出た希望でした。

このような創意工夫については，「文化の押し付け」「同化」などの批判がなされることがあるのであるが，この点について，東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編（2008：80－81）で，野山氏はこう述べている。

北川さんのプレフォーラムの報告の中に，教室の生徒さんたちとバス旅行した時の話がありました。バス旅行で北川さんは，日本は時間通りに動くということ，時間が大切だということを経験を通して教えたいということでやっているということでした。これに関連して参加者の方から私に質問がありました。「あれは日本の文化の押し付けではないか，国際理解の観点から見れば非常に押し付け的な行為に思える」というのです。それは実は押し付けというよりも，これをやらないと学習者本人がある意味で損をするということと，人が人として生きる，能代で生きていくときにどうやっていくかというときに学ぶ必要があるものがい

くつかある，それを学んで初めて次の世代がうまく生きていけるということを分からせるには，やはり 5 年や 10 年必要だという長期的視野の中でやっているひとつの行為だという説明をしました。

2-3. のしろ日本語学習会の地域住民との接触機会創出のための創意工夫

地域住民との接触機会創出のために 10 数年前から「盆踊り」が実施されている。この盆踊りについて，嶋田（2009：117）はこう述べている。

最近は外国人を交えての盆踊り大会は日本全国アチコチで開かれるようになりましたが，この盆踊り大会はひと味もふた味も違う盆踊り大会なのです。町内会や商店街主催の盆踊りではなく，日本語学習会の先生方が「何とか外国人に日本の文化を知ってほしい。地域の人たちに外国人の姿を知ってほしい。そして互いに触れ合い，理解し合ってほしい」という思いからつくった盆踊り大会でした。町がお膳立てした大会に定住外国人が招待されて参加する，といったものではありません。ボランティア日本語学習会が主催して町の人々を巻き込んでの大会であるという点に，この盆踊り大会の大きな意味があると言えます。

外国人と地域住民との接触機会の創出については，「地域住民の方がイニシアティブを取らなければ」と考えることが多いのであるが，北川氏は，「外国人側が主体となって創出したイベントに，地域住民が参加してくる」という発想でイベントを企画・運営しているのである。イベントの内容として盆踊りを選んだ経緯について，北川氏は，『地域日本語教育から考える共生のまちづくり』で，こう語っている。

盆踊りに関しては，どちらかというとお年寄り，全然外国人を見たことも接触したこともない人は，アジアの人を怖いと思っている。ある程度の高齢の方は，中国とか韓国を差別的に思っている人たちがいますが，その人たちと交流する場がないか考えました。日本語教室だと絶対に来ません。盆踊りだったら，比較的高齢の人が参加しますし，一緒に踊るだけです。その後にいろんなことが見えてきました。例えばスーパーなどで会うと，「あら，あなた何しているの」と，高齢者が声をかけてくれるのです。田舎の場合は，昼に町にいるのは全部お年寄りです。ですから，お年寄りにいかにこの人たちを理解してもらうかが，すごく必要なことです。盆踊りを通じて，その方たちが声をかけてくれるようになった。分からないと，何々，どれどれとお節介おばさんたちがたくさんいてくれます。この間も，盆踊りで一緒に踊った人に助けてもらった話を生徒が報告してくれました。

盆踊りがこのような接触機会になるまでに，様々な紆余曲折があったそうである。北川氏はこう述べている。

能代に定住する外国人達が日本の社会に溶け込んでほしい，日本文化を体で理解してほしいという思いで，盆踊り大会を始めました。はじめの頃は，町のはずれの空き地でひっそりとやっていました。でも，常に地域社会や役所に働きかけを続けた結果，だんだん町の人たちも理解してくれるようになり，３年前に町の真ん中のこんな立派なけやき公園でやれるようになりました。

2-4. のしろ日本語学習会の行政への働きかけ

外国人にとって暮らしやすい生活の実現には，行政側のサポートが大きな力とな

る。のしろ日本語学集会の活動に行政をどのようにして巻き込んでいったのかについて，北川氏は次のように語っている。

確かにボランティアのときは，私は自分で名刺を作って，いろいろな窓口を回らなければならない相談事がたくさんありました。生きていく上には，例えば子どもが生まれると，母子手帳をもらいに行く。言葉が分からなければ何もできないので，最初のうちはついて歩きました。大変でした。でもそのときにフト見えたことがありました。窓口って結構優しいのです。インパクトを強くして交渉すると，私のような人間がいると分かると，どこの窓口も，「ああ，あなたはあそこから来たのね」とすごく親切なのです。県のコーディネーターという制度があります。これを発案したのは私です。なぜかというと，私のように手助けしているボランティアは，地域の中にたくさんいます。やはり最初は役所に電話で相談すると頭ごなしに，「何だか分からない人には教えられません」と言って切られてしまう。ですから，県の事業で日本語の指導者だけを集めた会議を開いて，証明書みたいな，印籠というかお墨付きを持たせてくれと要請しました。私は，そのとき一番印籠が欲しかった。それがあることによって，行政側の窓口も，割とすんなり受け取ってくれました。

コーディネーターというポジションを得た後は，行政側にとって「役立つ」存在として活動を継続している。

それから行政に日誌を書く。お金をもらわないから書かせてくれと。なぜかというと，場所を確保してもらっていたので，やはり場所を確保してもらった以上は，それなりの成果とか，何をしたとか必要でしょうと言ったら，担当者は「そうですね，あれば便利ですね」と。市町村はみんなそうですが，役所の窓口はだいたい 4 年に 1 回代わります。担当者とすごくうまくいって，よかったといっても，その人が代わったらまたゼロよりももっとひどいというのが多い。それが行政のやり方ですから，続けてくためには日誌みたいなものを残していく。でも，役所の人に「日誌を信じていいのか」と言われて，私は非常に気分が悪かったのですが，そこで思ったのが，新聞記事。新聞記者に書いてもらうのは，嘘とは受け取られないので。私はあまり名前を出したくないので，最初はほとんどしなかったのですが，途中から変わりました。何でも新聞に載せてもらおうと思いました。ただ，書くなら 3 回以上，教室を見てくださいと。うわべだけ見て書かれると，「とても楽しい教室」で終わりです。その記事を読んだ人には，「遊んでいる教室だ」と判断されます。かといって，「勉強しています」と書かれると，あそこは勉強ばかりして，何だか学校みたいだとなる，そうするとお嫁さんは来ないのです。ですから，「教室の中を見て，教室の雰囲気を感じて書くということだけはしてください」とお願いしました。

多文化共生社会についての議論の中で，「行政はちゃんとしないといけない」という（愚痴のような？）提言がよく出されるのであるが，北川氏は行政側の支援を得るためのあらゆる方策（手練手管）を駆使している。行政との距離が近くなったことは，のしろ日本語学習会に対する行政側の支援の向上につながり，それによって，地域の中でののしろ日本語学習会の位置づけに，以下のような大きな変化が生まれることとなったそうである。

- 日本語学習会の部屋が優先的に取ってもらえる。
- 「異文化理解講座」への講師の依頼が来る（それを受けて，各国の

外国人を講師としてだして，ディスカッションの場を設ける）。

- 消防訓練への参加依頼が来る（それを受けて，各国語版の緊急避難支持プラカードの設置を提案する。

以上，「日本語支援の理念」「外国人が地域住民に受け入れられるようにするための創意工夫」「地域住民との接触機会創出のための創意工夫」「行政への働きかけの創意工夫」の順で，のしろ日本語学習会について述べてきた。理想的にすら思える多文化共生社会が能代市で実現しているのは，コーディネーターである北川氏の存在が大きいと筆者は考えている。

2-5. よい「地域日本語教育・支援に関わる人」の分析に基づくアプローチから見えてくるもの

上掲の実践で発揮されている北川氏の資質・能力と，嶋田（2011）が指摘した，地域日本語教育・支援に関わる人に求められる資質・能力，すなわち「日本語教育に関する知識・能力」「日本語教育に関する実践能力」「“その地域社会”を理解し，生きる力」「企画立案能力」「人をつなぎ動かす力」「対人関係を築く力」を重ね合わせてみると，「北川氏は，これらの資質・能力のほとんどを持っていらっしゃるだろう」と筆者は感じている。しかしながら，これらに含まれずに，筆者が一番，北川氏の言動に強く感じている項目が存在する。それは「覚悟」である。それは「目の前にいる困った人を見たら，『私が助けるんだ』と決意し，その決意に従って行動し続ける心意気」のようなものである。北川氏は，能代市在住の，いや更に拡がって北秋田地区在住の外国人が「困っている状況にある」と判断した場合は，躊躇なくその解決に乗り出し，実際にそれを解決していく存在なのである。「のしろ日本語学校があるから，自分たちは能代市に住みたい」という外国人が増加傾向にあるのも，北川氏の「覚悟」が在住外国人にしっかりと伝わっているからではないかと筆者は考えている。

同様の「覚悟」を，筆者は田尻悟郎氏（元島根県公立中学英語教諭，現在は関西大学外国語学部教授。英語教育分野のカリスマ教師として有名である。）にも感じている。田尻氏の覚悟について，横溝（2010:40）は，以下のように述べている。

設定されている到達目標が高いレベルのものなので，それを反映したテストで要求されるレベルも必然的に高いものになっています。その高いレベルのクリヤーを目指して頑張る生徒を，田尻氏は励まし様々な形で支援し続けます。それでも，頑張りがもう一つ足りない生徒が出てくることもあります。そんな生徒に対して，田尻氏が採点を甘くしたりすることは決してありません。このことに関して，田尻氏は，こう述べています。

僕は厳しいです。絶対妥協は許さへん。でも絶対最後までつきあう。

授業終了のチャイムが鳴り休み時間になっても，インタビューテストを受けようとする生徒たちは列を作って，次の授業の開始チャイムが鳴るまで，自分の順番を待っています。「厳しいけど絶対に最後まで付き合ってくれる」ことが，生徒には分かっているからでしょう。生徒たちに嫌われることの多い「テスト」ですが，田尻実践では，生徒のやる気を引き出す一つの要因になっているようです。

北川氏と田尻氏には，共通の強い「覚悟」があり，それがそれぞれの分野で，周りの人を大きく変えていくエネルギーを生み出していると，筆者は考えている。その一方で，北川氏と同レベルの「覚悟」を，他の地域日本語教育に関わる人々に求めて

も，その実現は難しいだろうとも考えている。なぜなら，そういった「覚悟」を持てるかどうかは，個人差が大きく，また，それを持つようになる「大きなきっかけ」の体験が伴うことが多いからである。北川氏がどのような体験をし「覚悟」を持つようになったのか，そのプロセスについての情報を，筆者は本稿を執筆している現段階では持っていないのであるが，きっと何らかの強烈な体験があっただろうと推察される。

3. 地域日本語教育・支援に関わる人への研修はどうあるべきか

「覚悟」が大きなエネルギーを生み出し，それが優れた実践へとつながっているとはいっても，そのための「大きなきっかけ」を研修で提供するという発想には無理があるように思える。「覚悟」を研修で育てようとしても，うまくいくとは思えないからである。では，地域日本語教育・支援に関わる人を対象とした研修は，どうあるべきなのだろうか。

教師研修のデザイン・運営という筆者の専門分野から，強調したい点が一点ある。それは，研修は，ある程度長期にわたるものでなければならない。

ということである 教師の成長（teacher development）という観点から考えると，「s 自分が教えている教育現場で生じていることや問題点を把握し，その改善を継続的に試みる中で，教師である自分自身の見つめ直しが生じる（横溝・當作 2003：196）」ことが重要である。このプロセスを連続的に実施するには，ある程度の時間（例えば，半年から 1 年間程度）が必要となる。筆者自身の経験では，例えば「一日か二日の集中型」の研修で得た学びを，各自が自分達の現場に自分達の力だけで活かし続けることは，それほど容易ではないようである。そこで，学びを活かし続けるには，その研修の参加した者同士が，研修後も緊密にオフライン／オンラインで連絡を取り合い続けることが必要となる。そのようなネットワークが維持されていれば，その参加者に「（「覚悟」を生み出すような）大きなきっかけ」が生じた時には，それを共有することもできるだろう。それ故，「自己研鑽・自己成長を支えるネットワークの構築」は，研修を成功に導くためには必要不可欠であると考えられる。

参考文献

[1] 嶋田和子（2009）『*ワイワイガヤガヤ 教 師の目，留学生の目*』教育評論社。

[2] 嶋田和子（2011）「地域日本語教育・支援に関わる人々の役割と求められる資質・能力」『*平成 22 年度文化庁日本語教育研究嘱託 生活日本語の指導力の評価に関する調査研究－報告書－*』日本語教育学会，131-135.

[3] 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編（2008）『*地域日本語教育から考える共生のまちづくり：言語を媒介に共に学ぶプログラムとは*』（多言語・多文化協働実践研究５）東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター。

[4] 横溝紳一郎編著，大津由紀雄・柳瀬陽介著，田尻悟郎監修（2010）『*生徒の心に火をつける－英語教師田尻悟郎の挑戦－*』教育出版

[5] 横溝紳一郎・河野俊之（2005）「日本語教師の実践能力の解明に関する一考察：４つのアプローチ」中川良雄編著『*日本語教師養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する研究調査*』平成 16-17 年度科学研究費補 助金基盤研究(B)研究成果報告書，181-188.

[6] 横溝紳一郎・當作靖彦（2003）「アメリカの教育改革から日本国内の日本語教師教育への提言」當作靖彦編『*日本語教師の専門能力開発：アメリカの現状と日本への提言*』日本語教育学会，167-20